

## Book Review

自著によせて・・・松村秀一

### ■ 住に纏わる建築の夢ーダイマキシオン居住機械からガッツ構法までー／著者：松村秀一



修士時代に内田先生のご指導の下で工業化住宅の研究を始めてからほぼ30年。日本のプレハブ住宅の歴史を皮切りに、新しい業態としての地域ビルダー、プレカット構法による木造住宅生産社会の変化、プレキャストコンクリート技術のオープン化、欧米の建築家による

様々な工業化住宅の構想史、センチュリーハウジングシステムや所謂SI住宅、団地再生にコンバージョン、宇宙居住施設、持続的な居住地の運営と権利形態、ライフスタイルと住まいの関係、果ては土や煉瓦ブロックを用いた世界住宅構法の可能生等々と、様々な分野に首を突っ込んできました。傍から見れば、あちこち食い散らかす落ち着きのない雑食系の研究者と思われるかもしれませんが、私は自分自身がピンと来た研究テーマは、一見相互に

関係がないように見えたとしても、いずれ何らかの大きな一つのストーリーを形作るものと、とても楽観的にはありますが直感というものの揺ぎ無さを確信しております。

この本は、そんな雑食系研究者である私が、直感を頼りにこの30年選び考えてきた中で未だに忘れずにいる事柄を、一般の読者向けにできるだけわかり易く書こうとした、ある連載記事を中心にまとめたものです。取上げたトピックがランダムだったものですから、目次もただ「1講」～「10講」と素っ気ありませんし、「はじめに」も「おわりに」もありません。10講のどこから読んで頂いても問題ありません。もし手に取られる機会があれば、どうぞどこからでも気楽に読んで頂きたいと思います。ただ、全体を通して読むと何らかのストーリーーそれを「住に纏わる建築の夢」と呼んでみたのですがーが感じられるのではないかと期待もしてはおります。

■ 発行元／東洋書店

■ B6判 191頁＝1,995円(税込)

### 最近、私の読んだ本・・・伊藤誠三

### ■ 住に纏わる建築の夢ーダイマキシオン居住機械からガッツ構法までー／著者：松村秀一

偶然に立ち寄った某大学生協で、見落としていたわが代表理事の著作を見つけ、購入した。一見して建築学生向け入門書のように思ったが、読後、特に住宅建設に関わる方々が業界への視座をあらためる意味でも、お勧めしたい一書と思った。

住宅建設の工業化を主軸に論は進められているが、そのはじまりから、近年、提起されている諸課題を網羅して、その梗概が説かれている。2001年に監修・刊行された「21世紀型住宅のすがた」があまりに実務的な編集なので、その背景解説のように読めた。何より嬉しいのは「20世紀の建築への夢」から説き起こされている事である。私が建築を志した50年程前の頃、ヴィトルヴィウスの「建築十書」で心を引き締め、ギーディオンの「空間・時間・建築」、リチャーズの「近代建築とは何か」等をバイブルとして学んだ頃の事を思い出したのである。確かに夢多き時代であり、「建築は凍れる音楽」と言う言葉を心の奥に秘めて、実務に取り組んできた筈だったが、それが何時の間にか、「ハコモノ」と蔑称

されるようになってしまった。そんな表現を抽き出したのが工業化住宅だったのかと掲載写真をみて思い当たった。

6講「これからの住宅に求められるもの」以降、工法から離れ、新しい住まい方への模索、新しい建築の夢について語られる。今まさに、夢を思い起さねばならぬ時がきているのだと共感した。現在、住宅建設に関わっている人には是非読んでもらいたいと思うゆえんである。

終項には「自分で作る」、「土に戻る」の項目がある。昨年だったか、地下道で路上生活者のダンボール古紙造「睡眠ユニット」をフランスのTVが取材していた。都市に於ける究極の住いと住い方というわけか。極限の個人空間と無限の共用空間である。又、その殆どが土に戻った縄文・弥生の一室住居も想起される。東アフリカでRC造の学校を設計したものにとっては思案すべき課題を与えられた気がした。この書に取り上げられた50年の建築生産の軌跡は私自身の越しかたと交差する事が多く、併行して自分史を辿る思いがした。同世代の諸兄弟も同様ではなかろうか。